うたったり、讃美歌の節をきれぎれに、ううううたったりします。そのうちに、わたしはからだじゅうが、みしみし寒くなってきました。ラルスも手ぶくろの中の手がひどく冷たくなったとみえて、たづなをわたしにわたし、血の循行をうながすために、手をぶるぶるふったり、手のさきをたたきあわせたりしつづけました。もう、歌もうたいません。しかし、ちっともいやがったり、いくてを苦にしていたりするのではありません。

「もうだいぶ来たね、おい。」と、十分おきぐらいに、わたしがこういいいするたびに、

「まだまだ。」と、元気よく答えこたえします。

そのうちに風が、なおひどくつよくなりました。ごうごう、ぴゅうぴゅうと森の木がうなりつづけます。

「おお、ここか、わかった。もう、あと一マイルですよ。」と、ラルスは、やがて、わたしをいきおいづけるようにこういいました。しかし、その一マイルというのはスウェーデンの一マイルで、われわれの七マイルなのですから、まだまだたいへんです。

そのうちにラルスは、ひょいと馬をとめて、くらがりの中を、じろじろと、すかし見ています。わたしには、八方まっくらでなんにも見えはしません。

「どうした？」と、わたしは聞きました。

「いま長い丘をおりたところです。ここからさきは、ふきっさらしで、雪がうんと、街道へふきたまるんです。今夜、雪かきがでてくれなかったら、むこうのほうは道がなくなるんですが。」と、いいいい考えこんでいます。この地方では、ふぶきで道がうずまると、農民たちは、牛や馬にすきをつけて旅人のために総出で、野原の中の道をかきわけて、でかけでかけするのです。

「ふいっ、歩け、アキセル。」

まもなくラルスはこういってむちをならしました。それからやく三十分ぐらいのあいだ、馬は、ふかいふかい雪の中を、ざくりざくりと、それは、のろっくさく、苦しそうに歩きました。と、まもなく、馬は、もう動けなくなったか、のそりと立ちどまって、ふうふう息をついています。ラルスは立ちあがって、くらがりの中をのぞきこみました。

「ふ、へんな森のそばへ来たな。」といいます。そして、

「ふいっ。」とむちでアキセルをたたきました。馬は、よろけながけ五足六足歩きましたが、また、ひょこりと立ちどまりました。